

# 自閉スペクトラム症児の言語を介した仲間との協同活動の特徴

—「船の色塗り」課題における相互作用の分析を通して—

吉井勤人

(山梨大学大学院教育学域)

KEY WORDS : 自閉スペクトラム症児 言語 協同活動

## I. 問題と目的

典型発達児では、1歳台半ばから、意図の共有に基づく非言語的な協同活動が可能になる(Warneken et al., 2006)。そして、3~5歳にかけては、協同活動の中で言語を使用して協同でプランニングする機能(Warneken et al., 2014)が高まっていくとされる。このように、協同活動は非言語から言語レベルへと発達していくと考えられる。一方、自閉スペクトラム症(ASD)児は社会的認知に中核的な問題を示し、特に、非言語レベルでの協同活動の遂行に困難を示すことがわかっている(Liebal et al., 2008)。そして、非言語レベルの協同活動は、支援によって改善されることも報告されている(吉井ら, 2011等)。しかしながら、言語表出が可能なレベルにあるASD児が言語を用いてどのように協同活動を構築するのかといった言語を介した協同活動の特徴については十分に検討されていない。

そこで、本研究では、言語表出の可能なASD児2名を対象として、船の下絵に色塗りやスタンプを押して1つの船を制作する「船の色塗り」課題を縦断的に実施し、そこでの子ども同士の相互作用を分析することで、言語を介した協同活動の成立過程と特徴を検討する。相互作用は、無藤(1997)を参考に協同活動に関係するエピソードを抽出して質的分析を行う。

## II. 方法

1. **対象児** : 特別支援学校小学部の同じ学級に在籍する、知的障害を伴う自閉症の男児(A児)と女児(B児)の2名を対象とした。生活年齢は2名とも8歳台であった。精神年齢はA児が3歳台、B児が2歳台であった。2名は、多語文による表出が可能であり、要求、質問、簡単な質問への応答、三語文程度の報告ができていた。なお、本研究の実施に当たっては、事前に本研究計画を説明して学校と保護者から承諾を得ている。

2. **観察場所・期間** : 観察は特別支援学校の小部屋を借りて実施した。観察は、原則として3カ月に1回の頻度で、計3回実施した(現在、継続中)。

3. **課題及び道具** : 1隻の帆船の描かれている「ぼくらの船」(小泉・山田, 2011)を下絵として用いた。船の下絵に色塗りをするためのプラスチック色鉛筆(12色)、また、下絵にスタンプを押せるように木製の動物スタンプ(さる、ねこ等10種類)を用意した。

4. **手続き** : 長机の上に色塗り用の下絵(「ぼくらの船」)を置き、A児とB児が長机の手前に隣同士で並んで座るように指示した。「クーピーで色塗りをしたり、動物のハンコを押したりして、二人で一緒に船をつくってください…始めてください」などと指示して、下絵の両側に色鉛筆と動物スタンプを置いた。

5. **記録・分析方法** : 1回目と3回目の観察場面を、VTR2台で記録した。まず、開始の合図後から終了までを分析対象として、各場面におけるA児とB児の発話、指さし、表情(笑顔)、仲間または事物への視線の動き、「船の色塗り」に関連した身体の動きを逐一書き起こした。次に、相互作用は、協同性を志向する行為としての(a)他者の動きへの注目、(b)知覚的共有(共同注意の始発と応答、相互的な顔

注視)、(c)身体・動きの共有(音声・動作模倣、同一行為の相互的遂行)、(d)基礎的な協同活動(共有された目標に応じた相互的・相補的行為)、(e)高次な協同活動(プランの共有と行為の相互確認)、協同性を志向しない行為としての、(f)一方向的な関与と回避、(g)道具的関与といった観点から、エピソードを抽出した。

## III. 結果

### 1. 1回目の観察

(a)他者の動きへの注目 Ep1 B:(両手でスタンプを持ち用紙に押す)→A:(Bが用紙に押したスタンプを見る)

(b)知覚的共有 Ep2 B:「はい、キリン、キリン」(キリンのスタンプをAに向けて差し出す)[共同注意の始発]→A:(Bの差し出したスタンプをちらっと見る)[動作応答]

(g)道具的関与 Ep3 A:(Bの持っているスタンプを無言でつかんで引っ張る)[動作要求]→B:(スタンプを手放す)[動作応答]

### 2. 3回目の観察

(b)知覚的共有 Ep4 B:(スタンプを下絵に押して)「見て、A、ついている」[共同注意の始発]→A:(Bの押したスタンプをチラッと見る)[動作応答] Ep5 A:(Bの描く線を見た後にAの顔を見る)→B:(顔を上げて、Aの顔を見る)。

(d)基礎的な協同活動 Ep6 B:「はい、A君、象さんやっついでいいよ」(スタンプをAの手元に置く)[提案]→A(受け取ったスタンプを押す)[動作応答] Ep7 B:(スタンプをAに差し出し)「はい、Aくん、はい、(下絵にスタンプを押して)一緒に、ぼんぼん」[協同活動の要求]→A:(自分でもっているスタンプを下絵に押して)「ぼん」[言語・動作応答]

(f)一方向的な関与と回避 Ep8 B:あはははは(笑いながらキャラクターの絵を描くAの腕の上に自身の腕をのせて、割り込むようにしてスタンプを下絵に押そうとする)→A:(Bの手を払って、再度、下絵に絵を描く)[動作拒否]

## IV. 考察

ASD児の子どもの同士の相互作用における言語を介した協同活動の特徴を共同の制作課題を設定して縦断的に検討した。1回目は、非言語的な相互作用が多く生じた。「他者の動きへの注目」やB児による言語を使用しての「知覚的共有」といった協同活動の基盤となる行為が多くみられた。一方で、相手に確認することなく相手の物を一方的に取る「道具的関与」も生じた。3回目は、知覚的共有に加えて、基礎的な協同活動が生じた。B児がA児に対して言語で「スタンプを押す」という目標を示し、目標を共有して互いに同一の行為を遂行できたことから、協同活動の成立における言語使用の重要性が示唆された。一方で、B児が一方向的に関わることでA児がそれを回避して協同性が破綻することがみられた。どのような相互作用で協同活動が破綻するのかを検討する必要もあると考える。  
\*本研究は科学研究費(若手研究(B) 課題番号15K17421)の補助を受けて実施しました。また、本研究は、特別支援学校小学部の先生方のご協力のもとに実施致しました。記して、感謝申し上げます。(YOSHII Sadahito)